

寝取られ予定のお飾り妻に転生しましたが、
なぜか溺愛されています

マーガレット

エステルの妹。派手好きな性格で、両親と共にエステルを虐げてきた。

バナラ

オーン男爵家の令嬢。初対面のエステルに何やら気になる言動をしてきて……？

セバス

ランブルグ家の執事。クロードを幼い頃から見守る、ダンディなイケオジ。

ルネ

ランブルグ家の侍女。平民出身ながらも有能で、エステル専属の侍女となる。

クロード

ランブルグ家の当主で、魔獣から国を守る責務を負う辺境伯。誠実な性格で整った容姿を持つものの、その身に宿る強大な魔力が理由で人々から恐れられている。

エステル

家族から蔑まれてきた過去を持つ、スターク男爵家の令嬢。自分がゲームヒロインに夫を寝取られるモブ役だと気付いてからは、前世の知識を活用して妻の地位を確立しつつ、離婚後の生活基盤を築こうと計画する。

目次

寝取られ予定のお飾り妻に転生しましたが、
なぜか溺愛されています

7

番外編 バレンタイン大作戦

275

寝取られ予定のお飾り妻に転生しましたが、
なぜか溺愛されています

サアアア

雨音が聞こえたので窓の外を見ると、大粒の雨が降り始めていた。

「げっ、雨予報じゃなかったのに！」

やりかけの乙女ゲームがちよいどいい場面だったこともあり、私はゲーム機を手にしたまま、天井干し中だった布団をしまい込もうと手を伸ばす。

「良かった。まだ降り始めだから、まだそんなに布団が濡れていないわ……。あっ!!」

ぎゃああああ、手が滑ってゲーム機が落ちる……!

この部屋はマンシヨンの五階だから、ここから落としたらゲーム機が壊れてしまう。

今なら手を伸ばせばなんとかキャッチ出来るかも! 私は咄嗟^{とっさ}に身を乗り出しても、勢い余ってふわりと身体が宙に浮いた。

「……………っ!」

え、嘘!? 待って、このままだと落ちちゃうんじゃない?

ゲーム機を拾うためにベランダから落ちて死ぬなんて、そんなダサい終わり方は嫌だああああ!!

——はっ!?

あれ? 身体が一瞬宙に浮いたような気がしたのに、なんともない……?

それに、布団を取り込もうとして立っていたのに、椅子に座っている。

そうだ、ゲーム機はどこへ行ったのだろう。両手を広げてみるが、そこには何もない。

ああ、やっぱりあのまま落としてしまったのかしら。

というか、先程から視界に入る服が、私が着ていた物とは明らかに違うのだけど。

オレンジ色の布地にレース……かしら? やたらヒラヒラしているし、裾が長くてまるでドレス

みたいだわ。しかも、目の前には綺麗なテーブルクロスがあつて、その上に紅茶と茶菓子が置かれている。

私の家ではテーブルクロスなんて使用しないし、こんな立派な茶器も置いていない。

どうやらここは自宅ではなさそうだけど……この一瞬で何が起こったのだろう。

「……嬢」

誰かに声を掛けられてそちらを向くと、明らかに日本人っぽくない男の人がいた。

えええ!? 一体どうなっているの!?

「エステル嬢?」

エステル嬢って誰のことだろう。

首を傾げた途端、ドッと私の知らない情報が頭に流れ込んできた。

「……っ！」

『エステル、「能無し」のお前によく縁談が決まったぞ！』

『ああ、良かったわ！ これでやっと我が家からお荷物がなくなるわね。エステル、くれぐれもランブルグ卿の機嫌を損ねることのないよう気を付けなさい、分かったわね！』

両手を上げて喜ぶ夫妻、そして隣には意地の悪い笑みを浮かべた令嬢。

『ランブルグ辺境伯って言ったら、悪魔の瞳を持つ「紅の閣下」でしょ？ 恐ろしい方って有名じゃない。まあ、「能無し」なお姉様を娶（めと）ってくれるなら、どんな男でも喜ばないとね？ ああ、私には優しい婚約者がいて良かったわ』

何これ!? 怖い！

それに、あ、頭が……痛い!!

このまま座っているのが辛いから、どこか横になれる場所を探したい。

頭を押さえて立ち上がろうとしたが、身体が言うことを聞かずグラリと視界が揺れる。

あっ、これはダメだ。倒れる……

「エステル嬢!」

次に来るだろう衝撃に備えてギュッと目を瞑（つぶ）る。すると、ガタツ、という何かが倒れるような音が聞こえたと同時に、がっしりした温かい何かに包み込まれた。

そこで私の記憶は途絶えた――

……ん、頭が重い……

頭を押さえてゆっくり目を開けると、やたら煌（きら）びやかなシャンデリアが視界に入った。

こんな豪華なシャンデリアを照明として使用しているなんて、まるでお城の一室みたいだわ。

むくりと上体を起こすと、ゆらりと金色の長髪が目にかかる。純日本人だった私の髪色は黒なので、明らかに自分の色ではない。もしかして意識がない間にウィッグとか被らされたのかしら。

「仮装パーティーじゃないんだから、こんな金髪……え」

なに、この声!? 地声より一オクターブ高い気がする。

「んっ！ あ、あー」

やつぱり私の声、変だわ。それに、先程と同じオレンジ色の布が視界にチラチラ入るのが気になる。金髪にドレスのような服装って、今の私は仮装でもしているのだろうか。

自分の格好が気になり、鏡を探すために辺りを見渡す。

部屋全体は白を基調としていて、重厚な遮光カーテンに、木目に細工が施（ほどこ）された棚、そして小さなソファに丸テーブルが置かれている。まるで貴族が住む部屋をコンセプトにしているかのような上品な内装だ。

自室と明らかに違う部屋を興味深く観察していると、部屋の隅に鏡台が置かれていることに気付く。そろりとベッドから下りると、絨毯（じゅうたん）のふわっとした感触が靴下を通して足裏をくすぐる。

靴がすぐに見つからなかったため、私は靴下のまま鏡台の前まで歩き、鏡を覗き込んだ。

「……誰？」

ゆるいウェーブのかかった金髪に、小さなクリツとした琥珀色の瞳。目を引くような派手さはないものの、品良く整った顔立ちをした女が目の中の鏡に映し出されている。

「これは、夢？」

明らかに容姿が変わってしまった状況を受け入れられず、鏡台から離れてふらふらと部屋の中を歩く。

えええ、どうしよう。これって私じゃないよね。それとも夢かな？

とりあえず一旦ベッドに戻って落ち着こう。

やたら広いベッドの端に腰を下ろすと、自重でゆっくりと沈む。フカフカで心地いい感触は、まるでかの有名なフランス製高級ベッドを彷彿とさせる。

え？　なんでそんなことを知っているのかって？　それは、冷やかして行つた高級家具屋に見本品が置いてあったから、試しに寝てみたんだよね。

「ふう」

ああ、私のせんべい布団と違ってこのベッドの寝心地最高だわ。どうせならこの寝心地を存分に堪能しておこう、と貧乏根性丸出しでモゾモゾと布団を被る。

理解不能な事態が続いて緊張していたようで、布団の中に入るとほっと気が緩む。

頭を整理する意味でも、今までの自分の過去について回想することにする。

私は決して裕福な家庭の育ちではない。

貧乏子だくさんの家庭で育った私は、常に家事をしたり下のきょうだいの面倒を見ていたりした

ので、同世代よりも生活力があつたように思う。

当時はお洒落や恋バナでキラキラした学生生活を送る学友が羨ましく、なぜ自分だけが苦勞しなければならぬのか、と恨めしい気持ちでいっぱいだった。

そんな気持ちに蓋をするかのように、学生時代はよく図書館で恋愛小説を借りては家事の合間を縫って読んでいた。本を読んでいる時は現実から目を背けることが出来たし、読み終えた後もストーリーを思い返すと幸せな気分になれる気がした。

そんな暗黒の学生時代を送っていた私だったが、社会人になり家を出て自活をするようになった時に、この生活力はとても役に立った。

「あの当時の苦勞は無駄ではなかったし、それがあつたからこそ今の私があるのよね……。って、年を取ると独り言が増えるわね、ははは」

アラフォーの私は就職氷河期世代だったこともあり、就職先は薄給なうえに万年人手不足で残業も多い中小企業だった。けれど周囲の人は優しく、特段不満もなく社会人生活を謳歌していた。

休日は仕事疲れから家に引きこもっていて、学生時代から読んでいた恋愛小説を始め、乙女ゲームや異世界転生ものの恋愛小説で心を満たす。

今日は仕事休みだったので、やりかけの乙女ゲーム『鳥籠の君に愛を教えてあげる』禁断の果実は蜜の味』をプレイしていたところ、布団を取り込む途中で手が滑ってゲーム機を落としかけ、慌てて手を伸ばし——気付いた時にはこんな状況になっていたと。

「あれ、もしかしてこの状況って、いわゆる異世界転生ってやつなのでは……？」

まだ状況を完全に把握出来ていないものの、なんとなくこの展開に覚えがある。

私はゲーム以外にライトノベルもよく読んでいたので、前世の記憶がある状態で別の誰かになって生きる『異世界転生』という設定をよく知っている。

もし仮にこれと同じ状況であるならば、私はあの後ペランダから転落死して、乙女ゲームの世界の住人になってしまったことになる。

通常の異世界転生のストーリーでは、元いた世界へ戻る描写というものはあまりない。

ということは、転落死した私はそのまま、この世界の住人として生きるしかないということなので……

「ええ、いきなりすぎるでしょ……」

こんな突拍子もなく異世界転生って起こるものなのか。

まあ、独身アラフォーだったし、社畜だったし、日本に執着があるわけでもない。

ただ、心残りだとすれば両親を始めとした家族のことだ。だが、あの家族はきょうだいが多いので、私一人が早死にしたところで家庭に悪影響があるかといえば、恐らくNOだろう。

あの環境で育ったきょうだいは皆遅いので、私がいなくてもお互いに支え合って生きていけると思う。寂しい気持ちもあるが、それよりも今はここで生き抜くことの方が重要だ。

断片的に思い出すこの世界での記憶を辿り、状況を整理すると、どうやら私は『エステル・スターク』というスターク男爵家の長子に転生したようだ。

貴族として生まれたエステルだが、その生い立ちを決して恵まれたものではなかったらしい。

——それはエステルが『能無し』だから。

この世界の人間はどの立場の者でも等しく魔法が使えるのだが、エステルは魔法が使えなかった。そういった者達を『能無し』と差別する風潮があり、家族もエステルを厄介者として辛く当たっていたようだ。先程の倒れる前に見た胸糞悪いシーンも、その一部だったのだろう。

この子は酷い家庭に育って大変な思いをしてきたのね……可哀想に。でも、エステルなんて名前のキャラ、ゲームにいたかしら？

「あ」

先程いた攻略対象者とエステルの記憶から、なんとなく思い当たる節がある。

『鳥籠の君に愛を教えてあげる』禁断の果実は蜜の味、通称『トリアイ』は婚約者や既婚者のいる攻略者から奪略をする、いわゆるNTR（寝取り）というジャンルのゲームだ。

私は寝取られや寝取りといった内容は苦手なのだが、普通の乙女ゲームだと勘違いして買ってしまったのだ。自分の落ち度もあるので、そのまま返品するのみなあ……と思い、とりあえず始めてみたのだが、コンセプト通りの凄まじい世界だった。

ゲームの中でエステルがお見合いしていたのは、とある攻略キャラだった。そうすると自然と私のポジションは決まってくる。

「もしかして、私って……ヒロインに寝取られるモブ役？」

なんてこった。この世界で生きていくつもりだったのに、まさかの寝取られ役に転生するとは。でも、これって考え方によっては悪くないポジションなのでは？

エステルの記憶を辿ると、お見合い相手は『紅の閣下』の異名を持つランブルグ辺境伯。愛し合っている関係なら寝取られ役は辛いものだが、エステルはランブルグ辺境伯とは今日が初対面でなんの繋がりもない仲だ。そもそもこちらの世界での縁談は政治的な意味合いが強く、親や親族間で勝手に決められることも多い。

急に決まった縁談なのではっきりとした事情までは分らないが、我が家の経営は良くなり、あちこちの家から借金もしていたと聞くので、政治的な面と金銭的な事情が絡んでいるのかもしれない。

そんなわけで、ランブルグ邸に来た理由も縁談後の顔合わせのためだったようだが、前世の記憶を取り戻したエステルは体調不良で対面中に倒れてしまったようだ。

縁談の相手は『クロード・ランブルグ辺境伯』といい、辺境地に巣食う魔獣達から国を守る特殊任務を担うお方だ。魔獣達の血に染まったその姿から『紅の閣下』として恐れられており、ゲーム内でもそう呼ばれていたが、数々の功績から貴族の中でも一目置かれていた。

まあ、嫁ぎ先がそんな感じなので、スターク家にいた時よりもお金に困ることはなさそうだし、寝取られた結果離婚しても、原因が相手側にある場合は補償金が支払われるので、食うに困る事態はなさそう。

それに、『トリアイ』のあらすじを確認した際に略奪時に断罪されるといった展開はなかったと記憶している。乙女ゲームにありがちの断罪がないポジションに転生したのなら、離婚時に備えて対策さえしておけば、この世界でも無事に生き抜くことが出来るかもしれない。

ああ、良かった。それならヒロインと攻略対象者にだけ気を付けていれば問題なさそう……って、さっきからコンコンと扉を叩く音がするけれど、誰か来たのかしら。

「はい、どうぞ」

返事をする、白シャツに紺色のジャケットとタイを着た長身の男が、使用人達をぞろぞろと引き連れて入ってきた。

貴族らしい服装と、かちつと纏めた黒髪から覗く眼帯にちよつとミスマッチな印象を受けるこの方は、先程まで顔合わせをしていた辺境伯——クロード様だ。

「エステル嬢、起きたのか。体調はどうだ？」

「はい、大丈夫です。クロード様、ご心配をお掛けして申し訳ございません」

「謝る必要などない。それより、君が無事で何よりだ」
先程は動揺していた上にすぐ意識を失ってしまったからそこまで顔を見ていなかったけど、クロード様とても綺麗な顔立ちをしている。

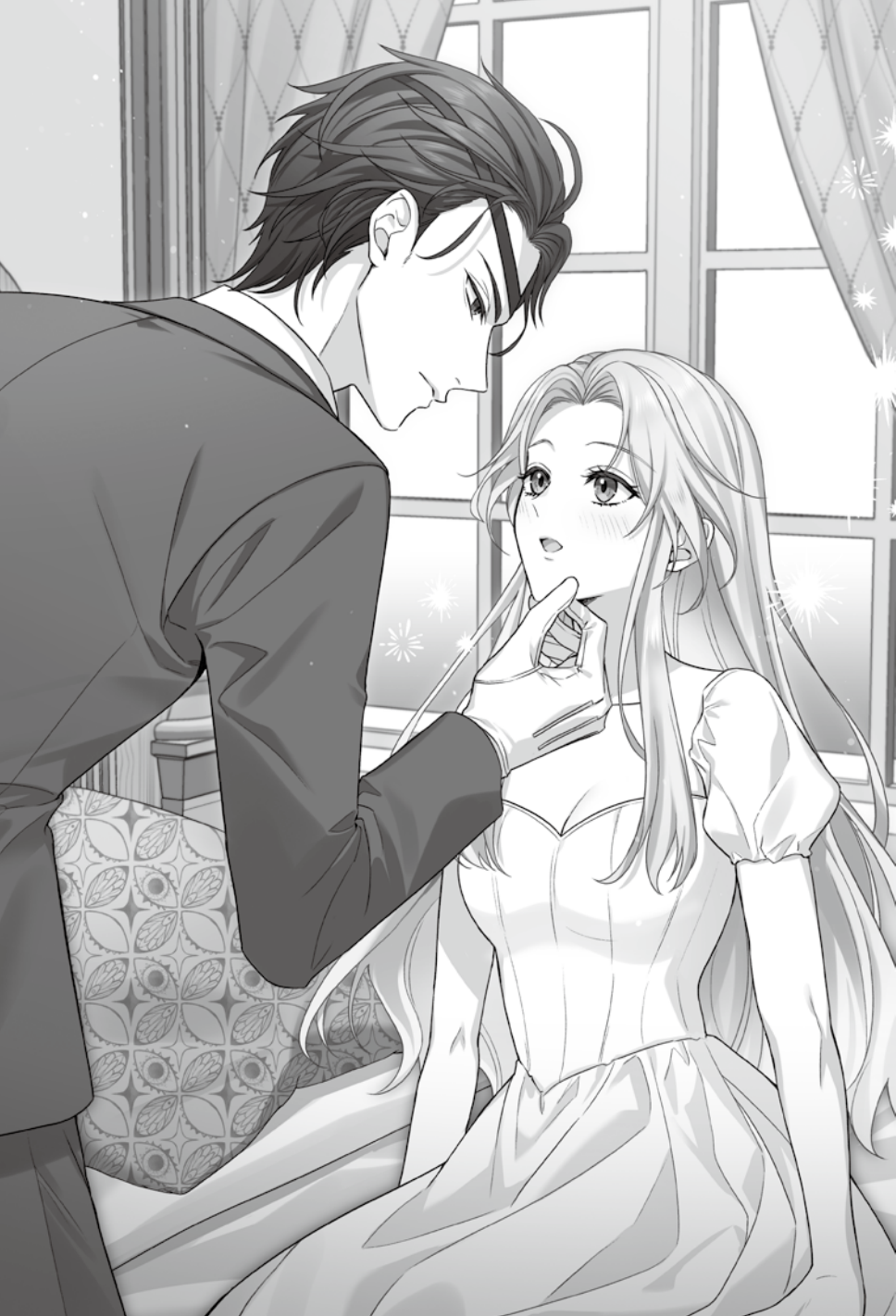
適度に焼けた肌、すつと通った鼻筋、薄めの唇、そして印象的な切れ長の紫瞳に片目眼帯。カラコンで色を変えた瞳を見ることはあるけど、きつと天然の色だね？

窓から入る日光を受けて、その瞳はキラキラ輝いているように見える。

「綺麗な紫色……まるで宝石みたい」

あ、しまった！ 前世の癖で思わず思ったことが出てしまった。

私の眩きを聞いてしまったらしく、クロード様はピシッと固まっている。



男性に綺麗だなんて言ったら失礼よね。ああ、どうしよう！

「た、大変失礼致しました！」

うう、いきなり失言をするなんて、私のバカバカ！

そんな事を思っていると、クロード様はグイッと私の顎を持ち上げた。

キヤーー!! いきなり顎クイですか!?

ウン十年と恋愛事とは疎遠な生活を送っていたうえ、イケメンと全く接点がなかった私には刺激が強すぎる！

「君は、この瞳が怖くないのか」

「へ!？」

怖い? 一体なんのこと!?

よく分からないけど黙っていたら失礼よね、何か返事をしないと！

「こ、怖くないですわ」

「……そうか」

クロード様はスッと私から手を離すと背を向けた。

はあ、いきなり美丈夫^{びじょうふ}に顎クイされるなんて、さすが乙女ゲームの世界ね。メチャクチャ恥ずかしかったわ。

両手で熱くなった頬を押さえていると、「念のために医者呼んで来る」と言い残し、クロード様だけ出て行ってしまった。

ゲームでやるのと生身で体感するのでは全く違う。唐突にイケメンとの接触があるなんて心臓が持たないわ……

本当は布団に潜^{もぐ}って悶えたいところだが、あいにく使用人がその場で控えているので、澄ました態度をしていると、再び扉をノックする音が聞こえる。

返事をする、医者らしき壮年の男性が中へ入ってきた。どうやらベテランの先生のように、テキパキと私の身体を診てくれる。

「脈も正常ですし、身体には異常はなさそうですね。もう起き上がって動いても大丈夫でしょう」すでに起き上がって鏡を見たり、ベッドでの寝心地を堪能したり、部屋で好き勝手にしていたのだが、それは内緒にしておこう。

「ありがとうございます」

私がお礼を言うと、お医者様は丁寧にお辞儀をして出て行き、入れ違いで執事らしき服装に身を包んだダンディなイケオジが入ってきた。

「旦那様の専属執事を務めているセバスと申します。エステル様、まだ体調が万全ではないようですし、本日はこのまま屋敷にお泊まりになられてはいかがでしょうか」

「え？」

エステルの記憶では、今日は顔合わせの予定だけだ。決まった縁談とはいえ、籍も入れていない男女が一つ屋根の下で一晩いたら変な噂が立つかもしれない。そうになったらクロード様が困るのでは？

でも、先程頭に流れ込んだ記憶……

ここを出ても、今の私に帰る場所なんてあるのだろうか。

「医者はあのように申しておりますが、万が一道中でまた倒れてしまつては大変です。それに、外も暗くなつてきておりますから、旦那様が大変心配しております」

「で、ですが」

「ここでの出来事は決して外部に漏れることはございませんし、旦那様を安心させるためにもどうかこのままお休みいただけませんか。その間不自由なきよう、私共がお仕え致します」

セバスさんの言葉ののち、後ろに控えていた使用人達が一斉に私に頭を下げた。

わわ、どうしよう。なんだか大事^{おおいで}になつてしまった。

「わ、わたくしが勝手に倒れたのが悪いのですから、クロード様に気に掛けていただく必要はございませんわ。それに、ほら！ もうピンピンしていますし」

セバスさんは私の言葉を聞くと、スッと目を細めた。

「エステル様は思慮深い方でいらっしゃいますね。ですが、ここは辺境地でございますので魔物が出没する可能性もございます。身の安全を考えて、屋敷に留まられた方がよろしいかと」

そうだった、この世界は魔法だけでなく魔物も実在する。元となる乙女ゲームが中世ヨーロッパ風のファンタジー要素が強い世界観だったから、きっとその影響を受けているのだから。

ちなみに魔物は人を襲うため、夜中に襲撃でもされたら命の保証はない。

（転生早々に命の危機に瀕するのはさすがに嫌だわ。それに実家も良い環境ではなさそうだし、こ

こは大人しくクロード様のご厚意を受けた方が良さそうね)

「では……お言葉に甘えさせていただきますわ」

「畏まりました、そのように旦那様にお伝え致しますよう。さて、意識が戻られてから何も口にされていらつしやらないでしょうし、すぐに軽食のご用意を致します」

セバスさんはニッコリ笑うと丁寧にお辞儀をして、部屋を出て行った。

(はあ。なんだか至れり尽くせりね)

私を監視する目的なのかなんなのかわからないけど使用人が控えたままなので、心の声が漏れないように口を閉ざしていると、別の使用人がお茶菓子とお茶を持ってきて、ささっとテーブルにセッティングしていく。

促されてお茶を堪能していると、今度は侍女らしき人達がやって来た。なにやら湯浴みの支度が整ったとのことで別室へ案内されたのだが、なかなか一人にしてくれない。

お風呂くらい一人でゆっくり入りたいので出て行ってもらうよう伝えても、「旦那様と初めてお過ごしになる大切な日ですから」とやんわり断られてしまった。

あとはされるがまま使用人達の手により念入れなお手入れを受け、いつの間にか用意された豪華なドレスに身を包む。「ドレスを汚したら大変」と最初は断ったのだが、私が着ていたドレスはすでに洗濯場に持って行ってしまったとのことで、渋々承諾した。

うう、なんだか落ち着かない。

ソワソワしつつ、これまた豪華なソファに座りながら、思わずため息が漏れる。泊めてもらうだ

けなのに、なぜここまで手厚いおもてなしをされるのかよく分からない。

考えてみても理由が思い浮かばず首を傾げていると、コンコンツと扉を叩く音がした。

「晚餐の準備が整ったようだ」

この声はクロード様だわ。通常なら使用人が呼びに来るものなのに、わざわざ主人が直接来るなんて。

「は、はい!」

お待たせしてはいけないわね。急がなきゃ!

駆け足で扉を開けたところまでは良かったけれど——わわわ、ドレスの裾を踏んでる。前に倒れる——!

と思った瞬間、ガツシリした腕に支えられた。

「つと、危ない。大丈夫か」

「す、すみません。私ったら……!」

令嬢なのにドレスの裾を踏んで転けそうになるなんて恥ずかしい!

顔が一気に熱くなるのを感じていると、バチツとクロード様と目が合った。

この人の瞳って、本当に綺麗だなあ。

そんなことを思っていると、目元が薄ら赤くなったクロード様が、ふいっと顔を逸らした。

「君は本当に真っ直ぐ見つめるのだな」

まずい、前世にない瞳の色だから好奇心もあってつい観察してしまった。失礼だと思われたの

かも。

「申し訳ありません！ 瞳が綺麗で、つい」

「ああ、いや。怒っているわけではない。……見つめられることに慣れていなくてな」

「おや？ クロード様はもしかしてシャイなのかしら。でも、ゲームでは無表情な冷酷キャラだった気がしたけれども。」

「考えているうちに、クロード様はさりげなく私の腰に手を回してエスコートする。」

「また転んでは危ない。私が側に付こう」

「は、はあ」

「うう、距離が近くて落ち着かない。」

前世でだってこんなスマートなエスコート受けたことがない。その上、隣にいる男性は乙女ゲームのキャラだけあってイケメンだ。こんなシチュエーション、嫌でもドキドキする。

「ここが食堂だ」

「ありがとうございます」

密着から解放されてほっとしながら辺りを見ると、食卓には色とりどりの美味しそうな食事がずらりと並んでいた。

「おおー、さすがは一流貴族。元の世界とは比べ物にならないくらい豪華な食卓だわ。」

席に着くと、早速使用人達が給仕を始めた。

「まずは乾杯でもしよう」

「あ、はい」

ワイングラスを片手に軽く乾杯をし、一口飲む。

あ、このワイン好きかも。香り豊かで、飲むとブルーンや黒い果実のような味わいの中に樽香たるこうのようなものを感じる。舌に残るスパイシーさもアクセントになっていて、癖になりそう。

前世はザルと呼ばれるくらい酒に強い体質だったこともあり、ついごくごくワインを飲んでしまう。するとクロード様が、「君は酒が行ける口か」と感心した様子で話し掛けてきた。

「え、ええ。このワインがとても美味しかったものですから」

「これは我が領で作られた物だ。希少な品種を使用して数が少なく、市場にはほとんど出回らなくてな。製造手法が普通のワインと異なる故に独特の風味があるのだが、これが良いアクセントになっているんだ」

「確かに、一口目に広がる風味に特徴はございましたが、リッチな味わいでとても美味しいですわ」

「そうだろうか？ このワインは人によつては好き嫌いが分かれるようだが、エステル嬢の口に合っているようで良かった」

クロード様は機嫌を良くしたのか、グイッと飲み干しグラスのワインを空ける。

そのまま和やかな雰囲気で歓談していると、扉をノックする音と共にセバスさんが入ってきた。

「旦那様、少しよろしいでしょうか」

さつきセバスさんと会話した時思ったけど、彼ってシゴデキだよな。

耳打ちしながら主人に手紙を渡すセバスさんを横目に、私は二杯目のワインをグビグビ飲む。クロード様はすぐに手紙の中身を確認していたが、しばしの沈黙の後、「エステル嬢に伝えたいことがある」と私に向き直った。

え、手紙の内容は私に関することだったの？

「晚餐ばんぱんの席ですまないが、こういった内容は早めに話をしておいた方が良いでしょう」

「は、はい」

ええ、なんだろう、悪い話かな。

私はワイングラスを置いてクロード様の話に集中する。

「今日は顔合わせの予定だけだったが、私はこのままこの縁談を進めたいと思っている。魔法でスターク家にその旨を伝えたと、了承の返事と記入済みの婚姻届けが届いた。明日私のサインをして提出するので、君はこれから私の妻としてここで生活することになる。式の準備については我が家に一任するとの返信があったので、全てこちらで取り仕切ろう」

「ええっ」

「晚餐ばんぱんが終わったら早速部屋を用意させる。屋敷内の物は好きに使ってくれていいし、何か不都合があれば使用人に申し出るように」

えええ、ちよつと待って。顔合わせからいきなり結婚生活スタート？

いくら貴族同士の結婚とはいえ、これはあまりに急展開すぎませんか？

話についていけずにはばかんとしていると、クロード様は冷静な表情のまま、「話は以上だ。さ、

食事を続けよう」と食事を再開した。

あー、なんか今日一日だけで随分色んなことがあったなあ……

フカフカのベッドの上にゴロンと寝転びながら、そんなことを考える。

乙女ゲームの寝取られ役に転生したかと思えば、いきなり攻略キャラと結婚することになるなんて。しかもこれ、たった一日で起きた出来事で、展開が早すぎて頭が付いていかない。

ゴロリと体勢を変えた私の脳裏に、転生時に入ってきた記憶が浮かぶ。

そう、転生前の彼女の記憶だ。

エステルは『能無し』として家族から蔑さげすまれてきた。両親は揃って妹ばかり可愛がり、いつも彼女は存在しない者として扱われてきたのだ。たくさんのおもちゃも、綺麗な服も、両親の愛も、それらは妹だけがもらえるもので、エステルはおこぼれを恵んでもらっていた。

食事だって、家族が終わった後に残った物を食べるのが常だった。教育も妹には家庭教師が付いたが、エステルにはなかった。でも、妹との境遇の差を哀れに思った家庭教師がこっそりと読み書きやマナーを教えてくれたおかげで、エステルにはある程度の知識はある。

また、エステルは地頭が良いようで文字の理解が早く、まるで辛い現実から目を背けるかのよう
に、ひたすら書物庫に籠もっては本を読んで過ごす日々を送っていた。

うんうん……よく頑張ったね、辛かったね。

彼女の境遇に同情してしまい、思わずよしよしと頭を撫でる。まあ、自分の頭なだけけど。

それに比べて、今の環境はまるで天国だ。フカフカのベッドと美味しい食事が用意され、一人の人間として扱ってもらえる。夫となるクロード様は『紅の閣下』なんて異名を持つ怖い方だと噂されているけれども、そんな風には全然見えないし。

……まあ、まだ初日だし、今後どう扱われるかは分からないけど。

しかし、孤独や家族からの虐げに耐え抜いたし、前世の私もウン十年間社会人として世の荒波に揉まれつつも生活してきた。

そう、今のエステルはちよつとやそつとのことで崩れるようなメンタルなどしてないのだ！

寝取られ役だし、今後クロード様がどう行動するかは分からない。でも、せっかく毒家族とおさらば出来たのだ。ここはランブルグ辺境伯夫人の立場を存分に堪能しつつ、いざ寝取られた後の生活基盤を整えておこう。

それにはまず、妻としてこの家のことを把握しておく必要がある。そのために、まずは使用人達と仲良くしておいた方が良さそうだ。

ああ、布団が気持ち良くて、だんだん眠くなってきちゃったな。明日に備えて少し休もうかしら。私は肌触りの良い布団を被り直し、そのまま意識を手放した。

寝心地の良いベッドで迎えた翌朝。ゆっくり眠ったおかげで身体が軽い気がする。

シャツと重厚なカーテンを開けると、窓からは陽の光が差し込む。

んー、いい天気！

手を上げてググツと背中を伸ばす。少し喉が渴いたと思い、部屋をぐるりと見回すと、テーブルに水差しとコップが置かれていることに気付く。

ごくごくと勢い良く水を飲んだあと、鏡台前で寝ぐせを軽く整えていると、コンコンと扉を叩く音がした。返事をするに侍女らしき女性が部屋に入ってくる。

「奥様、おはようございます」

もう「奥様」呼びをされるのか……違和感が強いんだけど、徐々に慣れていくものなのかな。

「おはようございます」

「昨晚はよく眠れましたか」

「はい、ベッドの寝心地が良かったのでゆっくり休めました」

「それは良かったです。あつ、申し遅れました。本日から奥様の侍女を務めさせていただく『ルネ』と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

私とそう歳が変わらないと思われるキビキビした侍女は、にこりと笑みを浮かべながらお辞儀をする。

「あ、ええと、こちらこそよろしくお願ひします」

慣れないシチュエーションにしどろもどろになっていると、ルネさんは「では早速身支度のお手伝いをさせていただきます」と慣れた様子で髪を梳く。

人以身支度を手伝ってもらうことがないため、どうしたらいいのか分からず大人しく座っていると、寝起きのボサボサ髪があつという間に綺麗な纏め髪になった。しかも化粧も丁寧に施されると、

「次はお着替えを用意しましたので、こちらへ」

クローゼットに通され、彼女の選んだドレスに身を包むと令嬢らしい姿に様変わりする。

「本日はお出掛けのご予定がなかったので、邸宅用のドレスに致しました」

薄水色を基調としたくるぶし丈のドレスはAラインで、よく見ると裾に刺繍が施されており、職人の手が掛かっている。生地にシルクを使用しているのか、上品な光沢と滑らかな肌触りが特徴的で、身体のラインに優しくフィットするため、見た目よりも軽やかで動きやすい。

「わあ。上品なのに動きやすくていいですね」

エステルが着ていたドレスはお下がりだったこともあり、裾に取り切れない汚れやほつれが多かった。素材が麻のようにゴワゴワしていたので保管時に付いた皺があちこちに残っていて、裾が変な方向へ広がっていた。

それに鮮やかなオレンジ色は目を引くが、妹より華奢な体格にはサイズが合わず、肩からドレスがずり落ちないように気を付けていたこともあり、非常に動きにくかった。妹はよくこんな不自由な物を好んで着ているな、とある意味感心していたのだが、それは単に物が良くなかっただけらしい。ランブルグ家のドレスは邸宅用なのに、圧倒的な格差を見せつけられた気がする。

「奥様の雰囲気に合わせて、落ち着いた色味のものにしてみました。これから朝食のお時間になりますので、食堂までご案内致します」

ルネさんの後に付いて食堂に着くと、ちょうどクロード様が扉を開けるところだった。

「クロード様、おはようございます」

「エステル、おはよう。昨晩はよく眠れたか」

「はい、おかげ様でよく眠れました」

「そうか、良かった。さて、立ち話もなんだから中に入ろう」

クロード様に促されて中に入ると、食事の美味しそうな匂いが部屋を満たしていた。

広いテーブルの端同士に座った途端、次々に料理が運ばれてくる。一品ずつの量は多くないものの、品数の多さに驚きを隠せない。ハムの盛り合わせ、様々な種類の焼き立てパン、卵料理、茹で野菜に数々の果物達……って、高級ホテルのバイキングかこは。

豪華すぎる朝食に呆気にとられていると、「君の好みはまだ分からないので、いつもより品数を多めに用意させた。好きな物を食べるといい」とクロード様は言う。

「お気遣いありがとうございます」

「お礼など必要ない。それに、これから長く過ごす家なのだから快適に過ごしてもらいたいと思っていてね。遠慮せずに要望があれば言ってほしい」

いきなり結婚を決めたことから強引な性格なのかと思っていたけど、色々と気遣ってくれているようだし、思っていた人物像とちよつと違うのかもしれない。

でも、朝からこんなにたくさんの料理はいらないかも。気遣い方がちよつとズレているあたり、まるで無骨な武人が見せる優しさのようで、彼の人となりが垣間見えた気がする。

「はい、分かりました」

彼の気持ちを素直に受け取ることにした私は、早速目の前にあった果物を手に取る。

これは木苺かしら？ そう思いながら口に含むと甘酸っぱい味が広がる。

朝の乾いた身体に瑞々しい果汁が染みわたる。ああ、美味しい。

だんだん食欲が湧いてきたので、籠いっぱいの焼き立てパンを手に取り、何も付けずに食べてみる。んん、小麦の味もすっかりしているし、香ばしくて美味しいわ。

昨日の料理も素材の味がしっかり生かされていて美味しかったし。ここの料理人は腕がいいのだろう。

「んー、おいひい」

あ、つい思ったことが口に出てしまった。

慌てて口を手で押さえて咀嚼していると、クロード様が小さく笑う。

「口に合ったようで何よりだ。それに、私も焼き立てのパンは何も付けずに食べるのが好きでな。昨日の酒の時も思ったが、もしかしたら君とは食の好みが近いのかもしれない」

「まあ、そうなのですね」

ちよつとした共通点が見つかったことで親近感が湧く。

お互いに言葉数は多くないものの、和やかな空気で朝食を楽しんでいると、ふと思い出したようにクロード様が口を開く。

「そういえば昨日受け取った婚姻届けだが、これから神殿に提出してこようと思う。ついでに領地の治安も確認してくるので、結婚早々すまないが数日家を空けることになった」

「私に気を遣っていただかなくても大丈夫ですわ。それよりお仕事が忙しそうですね。どうぞ道中

は気を付けて行つて来てください」

「ああ、そうするよ」

彼は食事を済ませると、「私はこのまま出るから、君はゆっくり食事してくれ」と言い残し出て行ってしまった。

さて、この後はどうしようかしら。

旦那様は出掛けてしまったし、朝食を食べ終えた後は暇になってしまふ。

手持ち無沙汰の私は、近くにいた使用人に何かすることはないかと話し掛けてみたのだが……

「エステル様は奥方になられたばかりですから、まずはこちらの生活に馴染んでいただければ幸いです」

とやんわり手伝いを断られた。やる事がなくなった私は、一旦自室に戻ることにした。

どうしようかとソファにぼんやり座っていると、ルネさんに声を掛けられる。

「奥様、今日はお天気も良いので、お庭の散策などいかがですか」

「え、いいんですか？」

「もちろんです。庭師が丹精込めて手入れした庭は素晴らしいですし、気分転換になると思いますよ」

「そうなんですわね、ではお言葉に甘えてもいいですか」

「はい、是非。わたくしがご案内します」

ルネさんの先導で屋敷から出ると、柔らかな日差しと心地いい風が頬を撫でる。

「んー、今日は本当にいいお天気ですね。外に出ているだけで気持ちいいです」

「それは良かったです。実は、まだ奥様も嫁がれたばかりで緊張なさっているかと思いますが、ご提案させていただきました。喜んでいただけただようで何よりです」

談笑をしながら庭散策なんて、一流貴族の妻っぽいなあ。……って、私は昨日からクロード様の妻になったんだっけ。

心の中で一人ツツコミをしつつ散策を続ける。

スターク家はお金がなかったから庭は見える部分だけしか綺麗にしていなかったが、ここ庭園は隅々まできちんと手入れが行き届いているようだ。どこを見ても雑草がボーボーに茂っているところはないし、小枝やゴミが散乱しているような場所も見当たらない。

綺麗に咲く花々を愛でていると、装飾用の石の上に動く何かがいることに気付いた。

お、こんなところにてんとう虫が。

私はそれを手に乗せてみた。実は前世で園芸を嗜^{たしな}んでいたこともあり、虫に対して苦手意識がないのだ。てんとう虫の種類によるが、赤地に大きな黒点を持つナナホシテントウは植物につくアブラムシを食べてくれる益虫^{えきちゅう}と言われている。見た目も可愛いので、植物にこれが付いていると勝手に名前を付けて可愛がつっていたこともある。

「まあ奥様！ いけません、手が汚れてしまいますわ」

「大丈夫ですよ。洗えばいいだけのことでですから」

慌てるルネさんに笑顔で返事をしていると、木の影に庭師のような格好をした初老の男性がしゃがんでいるのが見えた。何をしているのかしら？

てんとう虫を手に乗せたまま近付くと、私の姿に気付いたおじいさんは慌てた様子で立ち上がった。

「おっと失礼、お客様ですか。作業に夢中になっていて気付かず失礼しました」

庭師のおじいさんに、ルネさんは呆れた様子で話し掛けた。

「まあ、ドンさん。奥様にお客様なんて失礼ですわ！」

「奥様!? まさか、昨日皆がしていた噂は本当じゃったのか！」

「ドンさん、当主様が嘘を吐くわけないでしょう！」

「た、確かにそうじゃが……まさか本当に奥様を迎えるなんて。そうか、そうか、ダンブルグ家も賑やかになるな！」

「もう、ドンさん!!」

ふふ、どうやらこの家は使用人同士の仲が良いみたいね。

まるで親戚同士のような二人の掛け合いを微笑ましく見ていると、ドンさんと呼ばれるおじいさんが再び慌てた様子で私を見る。

「そうじゃ、奥様にご挨拶^{あいさつ}を忘れておったわ！ 奥様、ワシは庭師のドンと申します。この通り老いばれのジジイですが、何卒よろしくお願いいたします」

深いお辞儀と共に自己紹介をするドンさん。

最初は気難しい職人っぽい雰囲気です。少々近寄り難いのかなと思っただけ、こうして丁寧に接してくれる姿を見ると印象が変わる。

「スターク男爵家から嫁いで来ました、エステルと申します。ドンさん、これからよろしくお願いします」

手の平に虫を乗せたままだったので軽くお辞儀をすると、その不自然な動作が気になったのだろう、ドンさんの視線が手に向けられる。

「それはてんとう虫ですか？」

「ええ、そうですね。石の上にいたので、葉に乗せてあげようと思っていたところでした」

「ほほお、貴族のお嬢様が虫に触れるとは」

令嬢が虫に触れることは一般的ではないのかしら。でも、スターク家の書物庫だって蜘蛛や蟻とかの虫は出ていたし、本人も特段気にせず過ごしていたようだけ。

「他の方はどうか分かりませんが、あまり虫に抵抗感がない方なのです。過去に興味で園芸を嗜んでいたこともあり、てんとう虫が懐かしくて」

「なるほど、それなら虫にも慣れていらつしやるのも理解出来ましたわい。ちなみにどういった植物を育てていらつしたのです？」

「ええっと、トマトとかナスとか」

「とまと？ なす？」

「げ、そうだった！ トマトもナスも前世に近い物はあるけど、呼び方は全く違うんだった。

「や、野菜を育てていました」

「ほほお！ 野菜は簡単なようで奥が深いですから。ご令嬢が野菜の栽培をしているとは聞いたことがないですが、なかなか面白い趣味ですね」

「そ、そうですね。おほほほ」

令嬢は園芸で野菜を育てないの？ エステルの生活環境が普通じゃなかったから、貴族がどんな生活を送っているのか分からないのよね。

「ちなみに、野菜を自分で育てようと思った理由はあるのですかな？」

「そうですね……植物を育てるのは大変ですが、丹精込めて育てた野菜を食べることで、植物の持つ生命力を身近に感じることが出来る気がするのです。その感覚が好きで、気付いたら趣味になっていた、という感じでしょうか」

「ほうほう、奥様は本当に植物がお好きなのですね。そうじゃ、裏庭に菜園がありましたな。よろしければ見て行かれますか」

「ええ、是非！」

ドンさんはプロの庭師だし、どんな野菜を育てているのか気になる。

ドンさんとの会話が弾んでいると、ルネさんは呆れた様子で口を挟む。

「奥様、そのままではお召し物が汚れてしまいますわ」

うぐつ、確かにこのドレスはクロード様が買った物だし、汚して後で何か言われたら困る。

「確かにそうじゃな。土のある場所などに誘ってしまつて申し訳ないです」

ああ、せっかくドンさんと仲良くなれそうだったのに。このままでは使用人達と仲良くするきっかけを失ってしまうわ。

「ドンさん、謝らないでください。あ！　そうですわ。明日は私が持ち込んだ服装で来ますから、その時にドンさんの育てている食物を見せていただけませんか」

「は、はあ。ワシは構いませんが」

「私物ですし、汚れようが捨てようが自由に使えるはずですわ。ね、ルネさん？」

私の気迫に押されたのか、ルネさんは何か言いたそうな表情だったが、「え、ええ」と返事をする。よし、言質は取ったぞ。

「ほら、ルネさんもいいと言ってくれたことですし、明日またお庭で会いましょう」

「ほほほ！　侍女を煙に巻くとは、奥様はなかなか肝の据わったお方のような。さすがは当主様が見初めたお方だけあるわい。では、明日お会いしましょうぞ」

わーい！　明日が楽しみだわ！

「もう、奥様もドンさんも……。当主様にはこのことはナイショですよ」

「ルネさんありがとうございます」

「了解しましたぞ」

ふふ、楽しみが増えたわ。

ドンさんから離れて再び散歩を開始した私は、明日のことが楽しみでつい顔がニマニマと綻んでしまう。そんな様子が気になったのか、隣にいるルネさんが話し掛けてきた。

「奥様は貴族出身ですが、珍しい趣味をお持ちなのですね」

「そうかしら？」

「私のような平民でしたら理解出来ませんが、そういった貴族の方の話はあまり聞かないので」

「ええと、言わないだけで、多彩な趣味をお持ちの方もいらっしゃると思うけれど。おほほ」

なんて言ったらいいかわからないので、とりあえず笑って誤魔化す。

そういえば、先程のドンさんやルネさん達を見て気付いたことだが、この使用人は身分や出身に関係なく雇われているようだった。ルネさんは平民出身だと言っていたし、ドンさんの肌の色はこの国では珍しい褐色だ。

スターク家は男爵家だったけど、「貴族たるもの、よそ者などを屋敷には入れてはならぬ」と主張して、外国人の使用人は絶対に雇わなかった。クロード様はそういった偏見のない方なのかもしれない。

実家との違いを再認識していると、手のひらのてんとう虫が元氣よく羽ばたいていった。てんとう虫を葉に戻す任務がなくなり手持ち無沙汰になった私は、ルネさんと屋敷に戻ることにした。

慣れない廊下を歩き自室に戻る途中、何やら美味しそうな匂いがしてくる。

外に出ていたから気付かなかったけど、もうお昼時なのかしら。

「ねえ、ルネさん。いい匂いがするけれど、このあたりに厨房でもあるのでしょうか？」

「はい、一階の一番端に厨房がございます」

へえ、そうなんだ。

エステルは実家で虐待^{しいた}られていて、与えられた食事も残飯^{つま}を摘むようなものだった。ここでは一応妻のポジションだし、実家と同じ扱いを受けるとは思わないけど、ちょっと心配なので様子だけでも見ておきたい。

「お屋敷探索も兼ねて厨房を覗いてみたいのだけど」

「厨房……ですか？　中まで入らなければ大丈夫だと思いますが」

「どんな料理を作っているのか知りたいだけだから、ちょっと覗くだけです」

ルネさんからの許可を得て厨房前までやって来ると、中からガヤガヤと賑やかな声が聞こえてきた。扉を開けようと手を伸ばした瞬間、バアンツと勢い良く扉が開いた。

「きゃっ!？」

「うお、びっくりした！　こんなところに突っ立ってたら危ないじゃねえか」

「ご、ごめんなさい」

ああ、びっくりした！

全自動で扉が開いたかと思ったら、ガタイの良い男の人が目の前にいるんだもの。

「まあ、ジャン！　奥様に向かつてなんて口の利き方ですか」

「え、奥様!?　昨日の話は本当だったのか……!?　大変失礼しました!」

大柄な男性は申し訳なさそうに私に頭を下げる。

こげ茶色の髪を後ろで一つ結びにしたその人は、立派な体格と彫りの深い顔立ちから、まるでハリウッド映画に出て来るワイルドな男性俳優のような印象を受ける。

黒い前掛けをしており厨房を出入りしているので、きっとこの料理人なのだろう。

そういえばドンさんも同じ反応をしていたわね。考えてみれば、昨日来たばかりだし、持ち場を離れられない使用人達は私のことを見ていないから、驚くのも当然か。

「ルネさん、私は気にしていませんわ。昨日からクロード様の妻になりました、エステルと申します。よろしくお願いします」

「俺はジャンです。この厨房で料理長を務めています。……で、奥様がなぜこんなところに？」

「皆さんがどんなお料理を作っているのか気になったので、見学に来たのです。仕事の邪魔はしないので、後ろで作業の様子を見てもよろしいでしょうか？」

「厨房見学？　ははは、貴族のお嬢さんがそんなことを言うなんて面白いな」

「もう、ジャン！　申し訳ありません、奥様」

「ルネさん、大丈夫ですよ。厨房ではジャンさんが一番偉い方なのですし、お屋敷の中では私は一番の新人ですから、色々教えていただきたいですわ。それより、先程からとてもいい匂いがしますわね。どんなお料理を作っているのかしら？」

「ああ、今日は煮込み料理を作っていたんですよ。ただ、仕上げ用の飾り葉を切らしちまったから、ドンじいのとこの菜園で拝借しようと思ってたんです」

「ドンじい」って、さっきお庭でお会いた庭師のドンさんのことかな。

「庭師のドンさんでしたら、先程お庭にいましたよ」

「奥様、ドンじいにお会いたんですか？　ドンじいは偏屈なところがあるけど悪い人じゃないか

ら、どうか気を悪くしないでくださいね」

「え？　すぐく気さくで優しい方でしたよ？」

あれ、ジャンさんが固まったわ。私、何か変なこと言ったかしら？

「あのドンじい？　奥様、一体ドンじいと何を話したんですか？」

「ええと、園芸の話ですが」

「園芸……。なるほど、それでか」

「どうかされました？」

ジャンさんはしばらく何か考え込んでいたが、私の呼びかけに我に返ったようで、はっと顔を上げた。

「い、いや、何でもありません。それより初日でドンじいに気に入られるとは、きっと奥様の人柄が良いのでしょう」

「ふふ、お世辞は結構ですよ」

「やだなあ、俺はお世辞なんか言いませんって。厨房は慌ただしい場所ですが、是非中で見学して行ってください」

「ジャンさん、ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」

私もルネさんは、ジャンさんに促されて厨房の中へ入った。

「皆、奥様が厨房見学にお見えになったぞ！　失礼のないようにな！」

ジャンさんの言葉に反応して、使用人達が一斉にこちらを向く。

う、そんなに注目を集めなくていいのに、視線が痛いわ。

「さ、こちらに椅子があるので良かったら使ってください。じゃあ俺はドンじいのところへ行ってきます」

「ありがとうございます」

ジャンさんはそう言って厨房を出て行った。ひとまず邪魔にならないよう、隅っこの丸椅子に座つていよう。大人しく椅子に座ってみたものの、使用人達の「お前一体何しに来た」という視線は痛いままだ。

気まずさから思わず視線を逸らすと、厨房の奥で慌ただしく動いている料理人を見つけた。

作業台がここからでは死角になっていて何をしているのかよく見えないが、とても忙しそうだ。手持ち無沙汰だし、お手伝いを申し出てみようかしら。

「奥様、どちらへ？」

「ちよつと、お手伝いをしようかなと」

「え」

「ルネさんも私に付きつきりで大変でしょうし、ここに座って休んでいてください」

「で、ですが奥様——」

何か言いたそうなルネさんを置いて、私は皆の邪魔にならないように壁を伝って歩く。奥まで行くと、先程の料理人が急いで大量の野菜を切っている最中だった。

「大変そうですね、よろしければ私も手伝いますわ」

「え？ は、はあ」

料理人の男性は突然話し掛けられて驚いたのか、豆鉄砲を食らった鳩のように、ぽかんとしている。手伝いを拒否しているようには見えなかったたので、ここは少し強引に話を進めてみることにした。

「手はここで洗っていいかしら？ 包丁とまな板は、その使っていないものを使用しても？」

「は、はい。それは誰も使っていないので」

「じゃあ、お隣失礼しますね。もし邪魔になるようでしたら遠慮なくおっしゃってください」

「は、はあ……」

なんとも歯切れの悪い返事だが、なんとか了承してもらう。まずは私も戦力になることをアピールして、足手まといにならないことを示した方が良さかもしれない。

前世では一人暮らし歴が長く、節約も兼ねて毎日自炊していた。それに、趣味の園芸でとれた野菜を美味しく調理することも当時の自分にとっては楽しみの一つだった。

葉野菜を重ねて、隣の使用人と同じように千切りにしていく。

トトトトト

包丁の小気味よい音が辺りに響く。

「お、奥様、手際が良いですね」

「ふふ、そうかしら。それより、毎日こんなに野菜を処理しているのですか？」

「普段はこんなに大量ではないのですが、今日はたまたま数日分の^{まかな}賄いを作る日なので」

「そうなのですね。では、忙しい時は私もなるべく手伝いますわ。皆で協力すれば早く終わりますし」

「は、はあ」

手元にある葉野菜を切り終えると、近くにタマネギのような野菜が置いてあった。分担した方が効率いいし、私が作業しよう。

「次はこちらの野菜を担当しますね。切り方はどうしたら良いですか？」

「あ、では僕が先に切るのので、それと同じようにしていただけると助かります」

「分かりました」

なるほど、くし切りで良いのね。じゃあまずは皮を剥いていこう。

休まず手を動かしていると、なかなか戻らない私を心配したのか、ルネさんがこちらに向かってきていた。

「お、奥様!? そんなことをしたら手が荒れてしまいますわ」

「あ、ルネさん。休んでいてくださっていいのに」

「そんなわけには参りませんわ。それより料理などされたら——」

「大丈夫ですよ、そのくらいで手荒れなんてしません。それにほら、皆で作業した方が早く終わりますし」

「奥様……。分かりました、では私も手伝います」

私はただやりたくてお手伝いしているだけだし、本当にルネさんは休んでいてくれていいのに。

でも、ルネさんは腕まくりを始めて手伝う気満々だ。

「じゃあ、ルネさんはこの野菜の皮剥きをお願いしますね。私はくし切りにしていくので」
「お任せください」

そうして三人がかりで野菜の処理をしていると、ジャンさんが戻ってきた。

「ジャンさん、お帰りなさい」

「お、奥様!? そんなところで何されてるんですか!？」

「野菜の下処理が大変そうだったから、お手伝いをしていました」

「ええ!？」

ジャンさんは慌てた様子でこちらにやって来た。

「下処理の仕方も正確だ。奥様、もしかして料理の経験がおりなんですか?」

……そうだった! 貴族の令嬢は料理なんてしないんだわ! でも、エステルがある程度のこと
は自分でやっていたのは事実だ。なんとかこの状況を誤魔化せないかしら。

「ええと……男爵家ですし、使用人を雇うお金もあまりなかったので、ある程度の身の回りのこ
とは自分でしておりましたの」

苦しい言い訳だけど、嘘は吐いていない。

「それで料理慣れしているんですか……? いやあ、奥様は生活力あるお方なんですわ」

「お、おほほ」

ジャンさんは感心した様子で私の話に頷いてくれる。

良かった、なんとか誤魔化せたっぽい。

ほっと胸を撫で下ろしながら、手元に残る未処理の野菜に目を落とす。今日は特別に量が多いよ
うだけど、毎食作るのだから厨房の仕事で大変だね。使用人達と仲良くなるきっかけ作りにも
なりそうだし、今後みんなの力になりたいな。

「ジャンさん、今日お手伝いをしてみて、厨房の大変さが理解出来ましたわ。私はまだ新人ですが、
人手が多い方が仕事も早く終わると思います。よろしければ今後も手伝いますわ」

「え!? 気持ち好啊いがたいですが、さすがに奥様に仕事なんて頼めませんよ」

「でも、クロード様の妻だからという理由で何もせずいたら、身体が鈍なまってしまうわ。どうか、
私のわがままを聞いてくれると嬉しいのだけだ」

ちよっと強引だったかな。でも前世では働き詰めだったこともあり、仕事の大変さや家事のあり
がたさは理解しているし、頑張っている人達を応援したい。

それに、人のために何かをすると活力が出る気がする。

「ははは! 奥様は面白いことをおっしゃる! よし、分かりました。次からはお声掛けいたし
ます」

ジャンさんは豪快に笑いながらノリ良く承諾してくれる。

提案を受け入れてもらえて素直に嬉しい。

「ジャンさん、ありがとうございます」

そう答えると、隣にいるルネさんは半ば呆れた様子だ。

「もう、奥様だったら。……仕方ありませんわ、怪我をするような危険な作業だけはいらないとお約束していただければ」

「はいっ、気を付けます！」

よーし、ここでの仕事が出来てやる気が出るし、これで使用人達との距離も縮められそうだわ。そして、来るNTRの際の味方を増やすのよ！

そんなことを思いつつ、私は残りの野菜の下処理に取り掛かった。

厨房でお手伝いした翌日。ふと目が覚めれば、部屋はまだ暗かった。カーテンを開けるとまだ空は薄暗く、時計は明け方の時刻を指している。

前世の時もこのくらいの時間帯に起きて身支度をしていたので、その習慣が染みついてしまっているのだろうか。二度寝しようと布団を被るも、目が冴えてしまつて寝付けない。

このままゴロゴロしていても暇なので、お屋敷内の散策を試みようかな。

近くにあった水桶で軽く顔を洗つて、寝癖の付いた髪を手櫛で整える。朝は肌寒いので椅子に掛けてあったショールを羽織り、人気のない廊下へと出た。

すでに働いている使用人がいるようで、一階から小さい物音が聞こえる。こんな朝早くから大変ね。挨拶でもしてようかしら。

階段を下りると、玄関口で掃き掃除をしているメイドの姿が見えた。

「おはようございます、朝から大変ですね」

「お、奥様!? おはようございます！」

「ああ、頭は下げないでください。この屋敷では私は新人ですし、皆様と仲良くしていきたいと思つているので。それより、こんな朝早くからお掃除ですか？」

「は、はい。この時期は落ち葉が増えてくるので、早く綺麗にしようと思ひまして」

この世界では日本と同じく四季があり、今の時期は秋に該当する。冬に備えて落葉広葉樹などの植物が大量に葉を落とすため、屋敷を綺麗に保つべくメイド達は明け方から忙しく働いているようだ。小学校の時に一斉清掃と称して校庭の落ち葉清掃をしたことがあったが、落ち葉は嵩張るので重労働だったことを思い出す。

昨日厨房でお手伝いした時も受け入れてもらえたし、今回も何か皆の力になれないかしら。

そうだ、落ち葉掃除のお手伝いを申し出てみよう。

「落ち葉掃除って結構大変ですね。人手が多いに越したことはないでしょうし、良ければ私も参加していいでしょうか？」

「そ、そんな滅相もない」

うーん、やはり上司が参加するとなると萎縮するのはどこも共通か。

それならもう少しフランクな感じで行ってみようかしら。

「……なーんて、大層なことを言ってみました、実は目が覚めてしまったので軽く体を動かしたかっただけです。皆様の邪魔はしないので、わがままを聞いていただけると嬉しいのですが」
メイド達は迷った様子だったが、お願いを断るのは失礼だと判断したようで、私に帚とちりとり

を持ってきてくれた。

「では、奥様は玄関周りの落ち葉を集めていただいてもよろしいでしょうか。私達は屋敷に続く道の落ち葉を集めてきます」

「はい！ 分かりました」

元氣よく返事をして、皆の邪魔にならないように玄関に移動して早速箒を動かす。シャツシャツと無心で手を動かしていると、外がだんだん明るくなってきた。

うーん、朝からお掃除をすると気分が良いわね。

そんなことを思いつつ黙々と手を動かして、玄関周りの落ち葉を集めきる。メイド達のものとは合わせるとこんもりと一山分になった。

「わあ、たくさん集まりましたね」

「奥様、ありがとうございます」

「いえいえ、私のわがままに付き合っていたいたのですから、お礼なんてそんな」

それにしても、この落ち葉の山を見てみると、学校でやった焼き芋体験を思い出すわね。

私のいた学校では、一斉清掃で集まった落ち葉と近くの畑でとれた芋で焼き芋を作り、給食の時に食べる体験があった。ここでも焼き芋を作ってみんなで食べたなら美味しそうだわ。

「ちなみに、この落ち葉はどうするのですか？」

「裏庭に捨てて花などの肥やしにする予定です」

「そうなんですね。あの、私がこの落ち葉を活用してもいいでしょうか」

「は、はい、大丈夫ですが……」

落ち葉は自由に使えるようになったので、あとは芋の準備と焚き火の場所をどうするかだ。

そういえば今日はドンさんの菜園にお邪魔する予定があったつけ。

菜園の広さによるが、芋はメジャーな野菜なのできつと菜園にあるはずだ。今は収穫の時期だし、もしお芋を育てていたら少し分けてもらえるかもしれない。もしなかったとしても、厨房にある物を分けてもらえば焼き芋が出来る。

「ありがとうございます。この落ち葉は私が責任を持って処分するので、ここに置いておいていただけですか」

「はい」

メイド達は首を傾げながらもお辞儀をして、各々の持ち場に戻っていく。私も一旦自室に戻ることにした。

部屋に戻りクローゼットの中を開けてみると、品の良い数々のドレスの奥からお見合いの時に着ていたものが出て来た。スターク家にいた時は大変貴重で高価なドレスだと思っていたけれど、こうしてランブルグ家で改めて見ると明らかに見劣りする。昨日邸宅用ドレスに着替えた時と同様に、実際に見比べるとその違いは歴然だ。

鏡に合わせてみると、サイズも雰囲気も全く自分に合っておらず、一見してお古の借り物だと分かるソレに複雑な気持ちになる。

もやもやした気持ちを振り払うべく、ドレスを椅子に掛けてふうと大きく息を吐いていると、コ

ンコンと小さく扉をノックする音が聞こえた。

「おはようございます」

「ルネさん、おはようございます」

私の返事を待ってから扉を開けたルネさんは、私に一礼をしてから入室した。

こういった細かい所作から、彼女が侍女として受けた教育の高さが窺える。

「奥様、もう起きていらしたんですね」

「ええ、明け方に目が覚めてしまつて。あ、そうそう、このドレスに着替えたいのでお手伝いしていただけますか」

ランブルグ家の物はどれも一流品であり、派手に汚すことが躊躇われる。この後の菜園で汚れが付く可能性が高いため、自分のドレスに着替えようと思つたのだ。

これを見るたび色々と思うところはあるが、気兼ねなく使えるという一点においてだけは優秀である。

「こちら……ですか。承知しました」

ルネさんは「こんな古物を着るの?」といった表情をしていたが、着替えを手伝い、ドレスに合わせてヘアスタイルまで整えてくれた。

「ありがとうございます、ルネさん」

「当然のことをしましたですわ。朝食が来ていますから、食堂までご案内いたします」

彼女に促されるまま食堂に行き朝食を済ませると、早速庭に出た。

庭園は広いから、ドンさんすぐに見つかるかしら?

辺りをきよろきよろ見ながら庭を散策していると、何やら人影のようなモノが目に入った。

しゃがんでいるようだけど、あの姿は紛れもなくドンさんだわ。

「ドンさん!」

「おお、奥様」

「今日は菜園見学でしたよね。今日は汚してもいい服に着替えて心待ちにしていましたの」

「ふおふお、そんなに楽しみにしてくださつたなんて光栄なことじゃ。それでは裏庭にご案内しますぞ」

ドンさんの後ろを付いていき、裏庭に辿り着くと、そこは小さめの農園のようになっており、様々な野菜が育てられていた。

「わあ、すごい! 色んな種類の野菜を育てているんですね!」

「ふおふお。奥様に喜んでいただけるなんて、庭師冥利に尽きますな」

あら、あつちの方にお芋の葉のような植物が茂っているわ。ドンさんにどんな植物か聞いてみよう。

「ドンさん、あちらに植えられている物はなんですか?」

「あれは蜜芋ですな。ちょうど収穫時期で、今掘り起こしている最中なんですじゃ。今年は豊作でずつしりと重い芋が多くて。あの脇の小屋にとつた芋を保管してあるんですが、ちょうど食べ頃ですじゃ」